

一般国道349号(大綱木工区)関連遺跡発掘調査報告1

向ノ入山遺跡

2019年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
福島県土木部

一般国道349号(大綱木工区)関連遺跡発掘調査報告 1

むかいのいりやま
向ノ入山遺跡

序 文

福島県では、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、避難指示が出された地域周辺について、復興と避難住民の帰還を加速させるため、8路線を「ふくしま復興再生道路」と位置づけ整備を進めているところです。国道349号は、この8路線のひとつです。阿武隈高地を南北に走る路線で、原発事故の影響で通行が制限されている浜通りの迂回路として増加した交通量に対応するため、本県土木部が川俣町大綱木工区及び二本松市杉沢工区で改良工事を実施しています。

福島県教育委員会では、この事業地内にある埋蔵文化財包蔵地について、本県土木部と保存のための協議を行い、現状での保存が困難なものについては、発掘調査により記録保存を図ることとしました。

本報告書は、平成30年度に実施した川俣町大字大綱木に所在する向ノ入山遺跡での発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査の結果、縄文時代、平安時代、中世、近代にわたる各時代の遺構・遺物が発見されました。

本報告書が、文化財に対する県民の皆様の理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料や生涯学習資料として、広く活用いただければ幸いに存じます。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力をいただいた福島県土木部県北建設事務所、川俣町教育委員会、公益財團法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和元年11月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

本報告書は、国道349号線改良工事（大網木工区）にかかる埋蔵文化財調査のうち、平成30年度に発掘調査を実施した川俣町に所在する向ノ入山遺跡の調査成果をまとめたものです。

向ノ入山遺跡の発掘調査の結果、縄文時代、平安時代、中世に属する複合遺跡であることが確認されました。阿武隈高地における各時代の土地利用のあり方や人々の生活の様子の一端を明らかにすることができました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域の歴史を理解する資料として、生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました地域住民の皆様をはじめ、川俣町や関係機関に深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和元年11月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 大沼博文

緒 言

- 1 本書は、平成30年度に実施した国道349号線改良工事(大綱木工区)遺跡発掘調査報告である。
- 2 本書には、川俣町に所在する向ノ入山遺跡の調査成果を収録した。
向ノ入山遺跡 福島県伊達郡川俣町大字大綱木字向ノ入山 埋蔵文化財番号：308300232
- 3 本事業は、福島県教育委員会が同土木部県北建設事務所の委託により実施し、調査・報告にかかる費用は土木部が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の次の職員を配し調査・報告書の作成にあたった。
専門文化財主査 佐藤 啓
他に、文化財主査 渡辺和行（公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向）の協力を臨時に得た。
- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が行い、文責は文末に示した。
- 7 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 8 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図、並びに福島県土木部県北建設事務所が作製した工事用地図を複製もしくはトレースしたものである。
- 9 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関および個人から協力・助言をいただいた。
川俣町教育委員会 普野建設工業株式会社 高橋圭次

用 例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 座 標 値 日本国土座標第Ⅳ系で設定した。
 - (2) 方 位 地図の方位は真北を示す。表記がない場合は図の真上を真北とする。
 - (3) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
 - (4) 縮 尺 掘図中のスケール右脇に縮小率を示した。
 - (5) ケ バ 遺構内の急傾斜の部分は「」で、緩傾斜の部分は「」で表現した。また、後世の搅乱の傾斜部は「」で表現した。
 - (6) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
(例) 基本層位 - L I · L II …、遺構内堆積土 - l 1 · l 2 …
なお、掘図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著 1999 日本色研事業株式会社発行)に基づく。
 - (7) 網 点 網点は各掘図中に用例を示した。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。
 - (1) 縮 尺 掘図中のスケール右脇に縮小率を示した。
 - (2) 土 器 断 面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕は一点鎖線で示した。
 - (3) 番 号 遺物は掘図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
 - (4) 注 記 出土グリッド、出土層位などは遺物番号の右脇に示した。
 - (5) 遺物計測値 各掘図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。
 - (6) 網 点 は土師器の黒色処理を示す。
胎土の纖維混和痕は断面中に▲・△で示した。
- 3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

川 俣 町 : KM	向ノ入山遺跡 : M I Y	堅穴住居跡 : S I	堅穴状遺構 : S X
木炭窯跡 : S C	土坑 : S K	焼 土 遺 構 : S G	グ リ ッ ド : G
基本土層 : L	遺構内堆積土 : l		

目 次

第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	3
第3節 歴史的環境	3
第4節 調査の方法	6
第2章 遺跡の位置と調査経過	
第1節 遺跡の位置と地形	7
第2節 確認調査	7
第3節 調査経過	9
第3章 発見された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要と基本土層	10
遺跡の概要(10) 基本土層(11)	
第2節 堅穴住居跡	12
1号住居跡(12)	
第3節 堅穴状遺構	17
1号堅穴状遺構(17)	
第4節 木炭窯跡	18
1号木炭窯跡(18)	
第5節 その他の遺構	21
1号土坑(21) 2号土坑(21) 3号土坑(21) 4号土坑(22)	
1号焼土遺構(23) 2号焼土遺構(23)	
第6節 遺構外出土遺物	24
縄文土器(24) その他の遺物(31)	
第4章 まとめ	32

挿図・表・写真目次

[挿図]

図1 国道349号線（大網木工区）位置図	1	図11 1号竪穴状遺構	18
図2 遺跡周辺の地形	2	図12 1号木炭窯跡	19
図3 周辺の遺跡位置	4	図13 1～4号土坑	22
図4 調査区の位置と確認調査	8	図14 1・2号焼土遺構、 2・4号土坑出土遺物	23
図5 遺構配置図	10	図15 遺構外出土遺物（1）	25
図6 基本土層	11	図16 遺構外出土遺物（2）	26
図7 1号住居跡（1）	13	図17 遺構外出土遺物（3）	27
図8 1号住居跡（2）	14	図18 遺構外出土遺物（4）	28
図9 1号住居跡出土遺物（1）	16	図19 沈線文系土器群終末の様相	33
図10 1号住居跡出土遺物（2）	17		

[表]

表1 周辺の遺跡一覧	5
------------	---

[写真]

1 遺跡全景（1）	37	9 遺構内出土遺物	42
2 遺跡全景（2）	37	10 遺構外出土遺物（1）	43
3 基本土層	38	11 遺構外出土遺物（2）	43
4 1号住居跡	39	12 遺構外出土遺物（3）	44
5 1号竪穴状遺構	40	13 遺構外出土遺物（4）	44
6 1号木炭窯跡	40	14 遺構外出土遺物（5）	45
7 1～3号土坑	41	15 遺構外出土遺物（6）	45
8 4号土坑、1・2号焼土遺構	41		

第1章 調査に至る経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯

国道349号は宮城県柴田郡柴田町から茨城県水戸市を結び、阿武隈高地西側を南北に縦走する国道である。東日本大震災とこれに伴う原子力災害により避難指示が発出された地域周辺について、復興と避難住民の帰還を加速させるため、「ふくしま復興再生道路」として位置付けられた8路線の一つで、福島県県北地域では川俣町大綱木工区および二本松市杉沢工区の整備が進められている。

国道349号の「大綱木工区」は、口太山トンネルを起点とし、国道349号川原田橋を終点とする。工区は、二本松市寄りの「1工区」と旧町内寄りの「2工区」の二工区に分かれており、本書で報告する向ノ入山遺跡は「1工区」に位置している。

平成28年3月、福島県県北建設事務所(以下建設事務所)から「ふくしま復興再生道路」の国道349号改良工事計画が提出され、これを受けた福島県教育委員会文化財課(以下県教委)から川俣町教育委員会(以下町教委)へ埋蔵文化財対応への依頼があった。そのため、町教委と建設事務所が協議し、路線内に周知の遺跡である上台館跡が所在することを確認した。その後、平成28年6月に開催した県教委・町教委・建設事務所による3者協議で、平成28年度は表面調査を実施し、確認調査は平成29年度に実施することを決定した。その後、平成28年11月に実施した表面調査で上台館跡に伴う可能性がある平場遺構を確認した。

平成29年5～6月に確認調査を実施した結果、館跡に伴う遺構・遺物は発見されなかったが、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が発見された。周知の上台館跡とは時代・種別の異なる遺跡であることから、「向ノ入山遺跡」として新規に埋蔵文化財包蔵地台帳に登録するとともに、工区内の

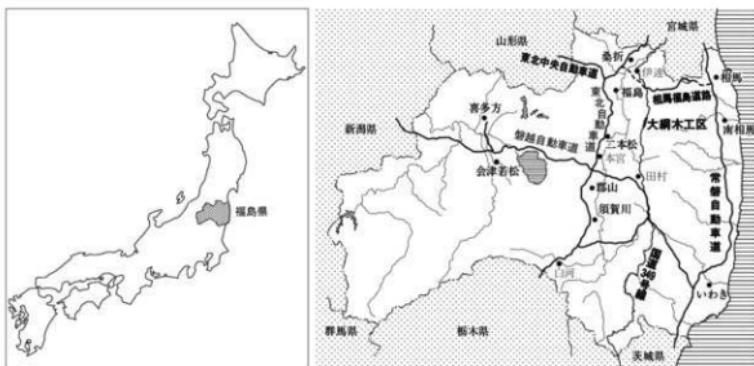


図1 国道349号線(大綱木工区)位置図

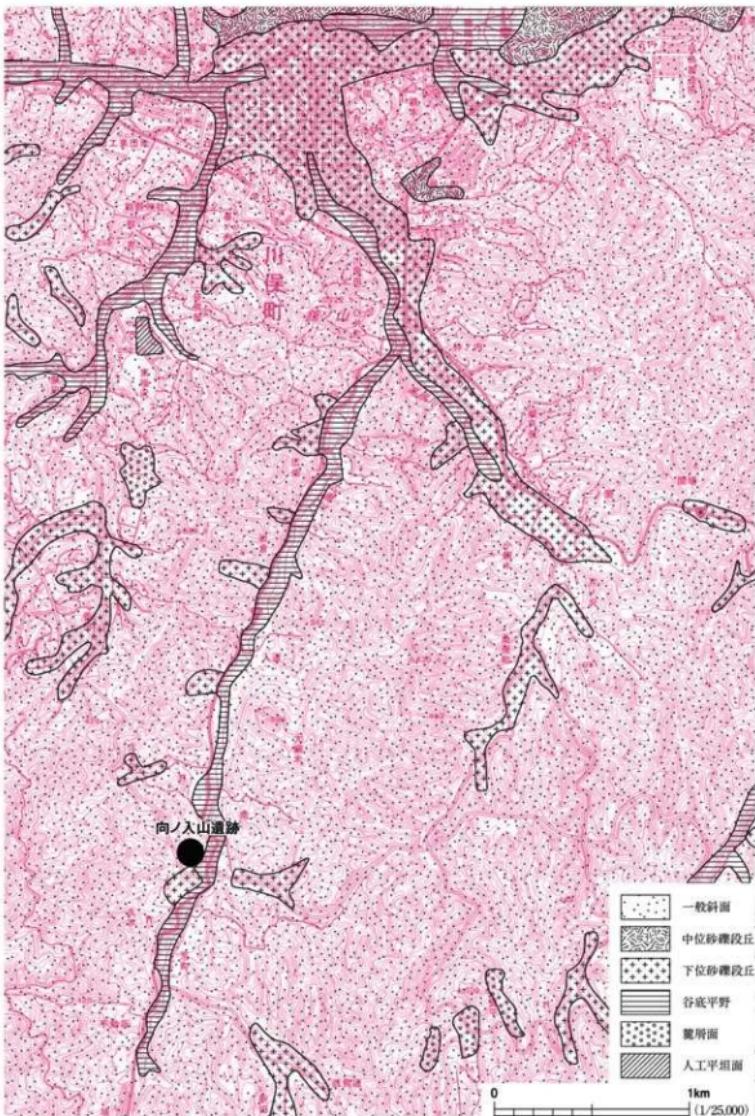


図2 遺跡周辺の地形

要保存面積を930m²と確定した。

その後、県教委は建設事務所と協議を重ね、平成30年度に発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置し、面積13,783km²と全国第3位の広さを有している。このうちおよそ8割が山地で占められ、東部には阿武隈高地、中央には奥羽山脈、西部には越後山脈が南北に連なることで、東より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」という、風土・文化の異なる3地域に区分される。

川俣町は県北部の伊達郡に所在し、阿武隈山地西側に位置する。北は伊達市、東が飯館村、南が二本松市、西が福島市にそれぞれ接している。地形的にはおおむね古生代から中生代にかけて形成された花崗岩類を基盤とし、山木屋地区・大綱木地区を中心とした山地、川俣地区や西福沢地区などの山麓地形、山麓地形の谷底を中心に発達した低地に大きく分けられる。山地では、花塚山・疣石山・口太山・木幡山などが残丘状にそびえたつ。山麓地形は低平な丘陵状の山地が発達し、これを小河川が樹枝状に開析するため、複雑で急峻な地形を形成している。低地は、広瀬川・女神川・口太川等の河川に沿った狭小な範囲に限られ、新旧二段階の段丘が分布するとされる。現在の集落の多くはこれらの段丘面に立地している。また、山地縁辺部の谷底低地に接する地区には、山麓斜面の崩壊堆積物がつくる山麓斜面が発達しており、崩壊堆積物は大綱木地区でも確認されている。

川俣町の気候は寒暖の差がやや大きく、降水量の少ない内陸的気候で山間地的な環境にあたり、標高の高い山木屋地区では冷涼で高原的な気候環境にあると指摘されている。

第3節 歴史的環境

川俣町には234を超える遺跡が存在する。本節では、当地域の歴史的環境を、従前までの発掘調査例と『川俣町史』の知見を基に概観する。現在のところ町内最古の考古資料は、小神地区の空久保B遺跡から発見された削器となるが、これについては旧石器時代末から縄文時代草創期に位置付ける意見もある。縄文時代の遺跡は100遺跡を超え、阿武隈高地の飯坂・小綱木・山木屋地区に多く分布するようである。早期の遺跡は北ノ俣遺跡・高屋敷A遺跡・大木戸遺跡などがあり、向ノ入山遺跡同様、沈線文系土器が発見されている。また、高屋敷A遺跡・大木戸遺跡では前期の土器も知られている。中・後期の遺跡は多く、庚申森遺跡や細越遺跡・大日向遺跡・梅窓遺跡・門森遺跡・前田遺跡などがあげられる。なかでも庚申森遺跡・細越遺跡・大日向遺跡・梅窓遺跡・門森遺跡では複式炉が付属する中期末葉の住居跡が検出されている。また、小綱木地区の前田遺跡では平成30年度に実施した発掘調査において、中期後葉の木製品や漆塗りされた土器が大量に出土した。

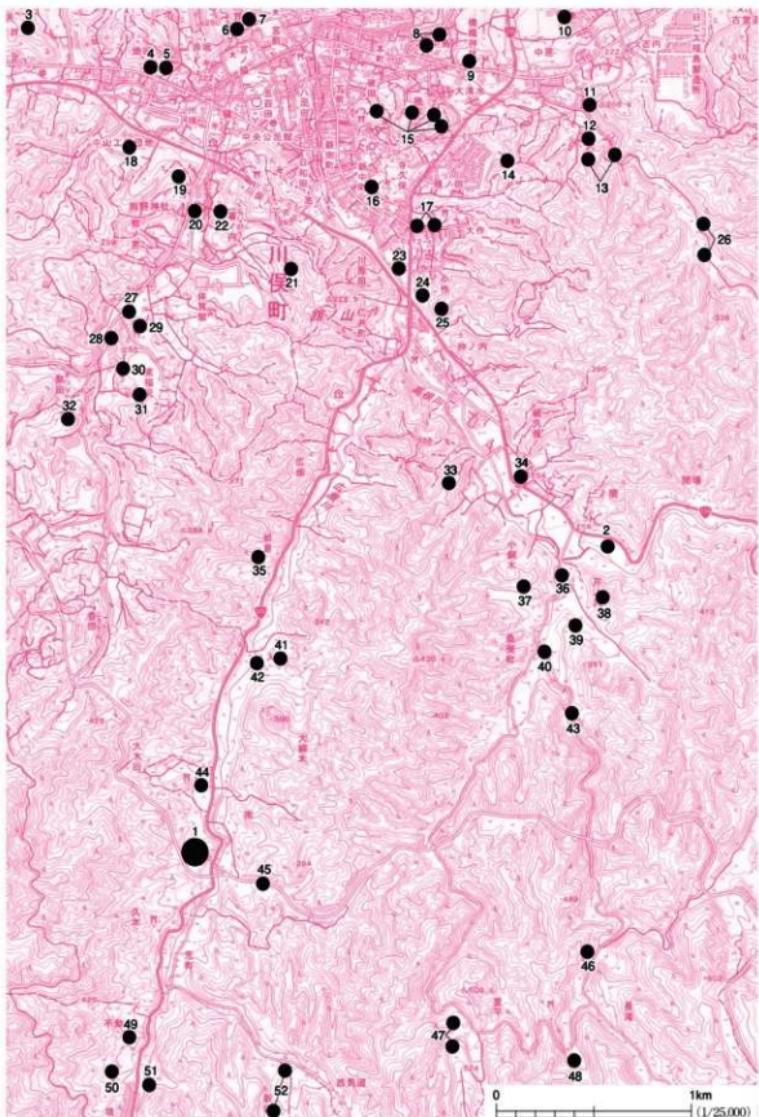


図3 周辺の遺跡位置

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	向ノ入山遺跡	縄文・平安・中世	集落跡	27	絆頭の石塔婆	中世	石造物
2	前田道跡	縄文	散布地	28	西田山琵坂	中世・近世	塚
3	長戸道跡	縄文	散布地	29	坊ノ入道跡	縄文・平安	散布地
4	愛宕塚	近世	塚	30	元尾敷跡	中世	城館跡
5	祖越道跡	縄文	散布地	31	西田山塚	近世	塚
6	宮前道跡	縄文・平安	散布地	32	祭田塚	近世	塚
7	神宮寺跡	平安～近世	社寺跡	33	梅ノ口塚	近世	塚
8	中島の石塔婆	中世	石造物	34	松木内船跡	中世	城館跡
9	後庵前道跡	縄文・中世	散布地・城館跡	35	花ノ木船跡	近世	城館跡
10	城ノ倉跡	中世	城館跡	36	出付道跡	縄文	散布地
11	双道塚	近世	塚	37	芦ノ沢道跡	中世	城館跡
12	谷沢道跡	縄文	散布地	38	石ヶ平塚	近世	塚
13	谷沢船跡	中世	城館跡	39	芦ノ沢道跡	縄文	散布地
14	尼船跡・耳塚	中世・中世・近世	城館跡・塚	40	霞ヶ入A道跡	縄文	散布地
15	大清水塚群	平安～近世	塚	41	高屋敷船跡	中世	城館跡
16	川俣代官所跡	近世	城館跡	42	常楽寺供養塔	中世	石造物
17	御堂神社の石塔婆	中世	石造物	43	霞ヶ入B道跡	縄文	散布地
18	梅窓道跡	縄文～平安・中世	散布地・城館跡	44	大木田道跡	弥生	散布地
19	双六山火葬墓群	平安	その他	45	大空道跡	縄文	散布地
20	熊ノ宮道跡	縄文・平安	散布地	46	下程原道跡	縄文	散布地
21	河股城跡	中世	城館跡	47	壹平道跡	縄文	散布地
22	鹿ノ入山塚	近世	塚	48	長瀬道跡	縄文	散布地
23	古町道跡	縄文	散布地	49	飯倉舟船跡	中世	城館跡
24	東円寺の石塔婆	中世	石造物	50	銀板舟船跡	縄文	散布地
25	小作塚	近世	塚	51	貴歌道跡	縄文	散布地
26	松洞道跡	縄文・弥生	散布地	52	新田道跡	縄文	散布地

町内において、弥生時代から古墳時代の遺跡は少ない。古代以降の様相と大きく異なることから、どのように古代へつながっていくのか、今後の課題である。これに対し、古代の遺跡は急増する。その遺跡分布は飯坂地区、鶴沢・東福沢地区、小神地区、山木屋地区の大きく4つに分かれている。このうち飯坂地区、鶴沢・東福沢地区、小神地区は、相馬と福島を結ぶ道路沿いに面しており、古代の街道を示す可能性がある。発掘調査例として梅窓遺跡や双六山火葬墓群がある。梅窓遺跡からは、鉄鉢模倣土師器や鉄製紡錘車・鍵先などが出土している。また、双六山火葬墓群の被葬者は、仏教の風習を理解した地域の豪族層と考えられる。

当地域は、中世初頭には奥州藤原氏の下、興福寺莊園小手保として管理されていた。中世の遺跡は城館跡を中心に比較的多く分布している。このうち、河股城跡と新助館跡で発掘調査が行われ、河股城跡では中世から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。当地域は、南北朝期には北朝方の川俣氏、戦国時代には桜田氏の支配下にあったことが文献史料から判明しているが、これらの領主と城館跡の対応はつまびらかにはなっていない。

奥羽仕置後、当地域は蒲生氏・上杉氏の支配を受け、梁川城代の管理下におかれた。上杉氏の滅封後は、幕府直轄地となり、元禄16(1703)年には川俣陣屋が創設された。この頃より、綿織物の生産が盛んになったとされ、「川俣羽二重」は幕末期から明治期にかけて世界的な名声を誇ること

になる。

昭和30年、川俣町・富田村・福田村・小島村・飯坂村・小綱木村・大綱木村・安達郡山木屋村が合併して新川俣町が成立し、現在に至っている。

第4節 調査の方法

向ノ入山遺跡の調査では、国土座標(世界測地系)に基づいた10m四方のグリッドを、調査区を取り囲むように設定した。グリッドはX = 181,200、Y = 67,200を原点とし、北から南へアルファベット、西から東へ算用数字を順番に付して「A 1 グリッド・B 2 グリッド…」と呼称した。測量基準点は業務委託し、工区内の既知点から移動して打設した。

表土の掘削・運搬および木根の除去は重機を使用して行った。調査区は斜面がきつく木根が多くなったことから大型の重機が搬入できなかった。したがって作業は、小型のバックホーと2.5 t クローラキャリアで行った。表土除去後の遺構検出作業と遺構精査は人力で行い、排土はクローラキャリアを使用して工区内に指定された箇所まで運搬した。この際、斜面での転倒防止のため、安定した足場を確保しながら作業を行った。

土層の観察は、堅穴住居跡は4分割法、土坑は2分割法を基本とし、大型の遺構については適宜土層観察畦を設定するなどで対応した。基本土層はアルファベット大文字「L」とローマ数字を用い「L I・L II…」とし、細分した場合はアルファベット小文字や「」を付して「L III a・L III a'・L III b…」などと表記した。遺構内堆積土については、アルファベット小文字を用いて「ℓ 1・ℓ 2…」と表記している。

各遺構の測量は、1/20の縮尺を原則とし、地形測量は1/250で採録し、トータルステーションを使用して行った。写真撮影は35mm判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムとコンパクトデジタルカメラを併用して行い、調査状況に応じて撮影している。調査区全景写真は、工事側から提供されたドローンを用いて撮影を実施している。

発掘調査で得られた出土遺物と図面・写真等の記録は、(公財)福島県文化振興財团遺跡調査部で整理・保管した。本報告の作成にあたり、挿図はイラストレーターを用いたデジタルトレースで作製している。写真図版は、遺構写真は調査時に撮影したデジタルカメラデータから、遺物写真は一眼レフデジタルカメラで撮影したものとそれぞれ掲載した。

報告書刊行後、出土遺物等の発掘調査で得られた諸記録は福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵する。

第2章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

向ノ入山遺跡は、伊達郡川俣町大字大綱木字向ノ入山に所在し、川俣町南端の町役場から南約4kmに位置している。

遺跡は、広瀬川左岸(西側)に面した丘陵上に立地する。広瀬川は川俣町を北流し、伊達市月館地区・霊山地区を経て伊達市梁川地区で阿武隈川に注ぐ。大綱木地区は広瀬川の源流にあたり、広瀬川は遺跡の約1km南の分水嶺を起源とする。

遺跡は、東を広瀬川、南北および西をこれに注ぐ沢で区切られた独立丘陵上に立地している。丘陵は南部に頂部をもち、尾根が東西に伸びる。丘陵の北側、標高310~330mの尾根上に階段状の平場群が認められ、この平場が「上台館跡」として中世城館跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されている。

遺跡の現況は山林および畠地である。山林は戦後にスギが植林され、畠地はかつてクワやブドウが植えられていたという。

第2節 確認調査

確認調査は、川俣町教育委員会が実施し、平成29年5月22日から開始した。調査にあたり、川俣町教育委員会には埋蔵文化財担当職員がいなかったことから、福島県教育委員会の市町村埋蔵文化財調査等技術協力事業を採用して対応した。調査は、森林伐採前であったことから重機を使用せず、人力によって掘削を行った。5月26日と6月2日に福島県文化財課の確認を受けた後、トレーニングの埋め戻しを開始し、6月16日に作業を完了させた。

確認調査では46本のトレーニングを設定した。その結果、1・2・8・9・11・12・28・29・32・39~41・43・45Tで遺構・遺物が発見された。遺構が検出されたのは8・9・29・39・45T、遺物のみ出土したのは1・2・11・12・28・32・40・41・43Tである。このうち8・9・45Tの遺構と出土遺物については第3章で、これ以外の遺構は本節で報告する。なお、遺構の年代が近世以前と推定されたものについては報告しない。

29Tから検出されたのは、径90cm・深さ12cmを測る不正円形の土坑である。遺構検出面は、第3章第1節で記述するLⅢbないしLⅢcに相当する土層であることから、縄文時代の所産と推定される。遺構の性格は不明である。なお、29Tからは土坑の北約2mの地点から炭化物の集中範囲が確認されている。39Tでは、LⅠ直下のLⅣ上面で土坑が検出されている。平面形は橢円形

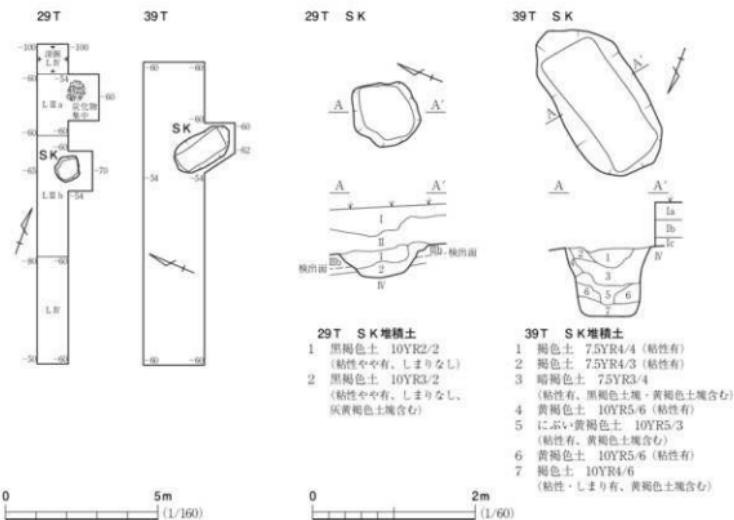
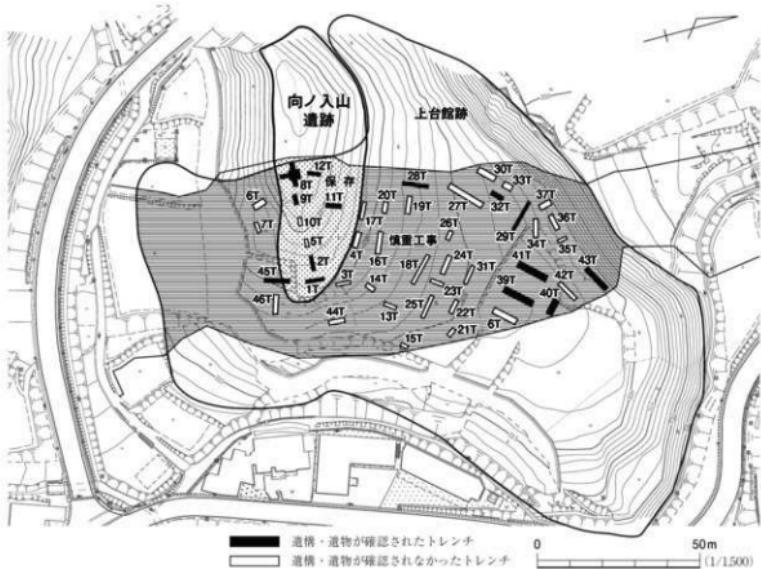


図4 調査区の位置と確認調査

で、大きさは200×104cm、深さ86cmを測る土坑である。底面は方形に整えられる。遺構内堆積土はいずれも自然堆積を示し、周壁の崩落に由来する土層も確認できる。以上の所見から、本土坑は落し穴と考えられる。出土遺物が縄文時代早期中葉であることから、縄文時代の所産である可能性が高い。

以上の結果により、遺構・遺物の分布が比較的密な、尾根部周辺の930m²について保存が必要とされた。ただし、推定される遺跡の性格が、登録されていた館跡とは時代・種別が異なる上に、尾根頂部の集落範囲が從来の遺跡範囲より広がる可能性を有していた。このことから、工区外を含めた尾根全体を「向ノ入山遺跡」として埋蔵文化財包蔵地台帳に新規登録した上で要保存とした。これ以外の範囲については、中世の城館跡であったことを示す遺構・遺物が認められず、確認された遺構・遺物も散漫な分布状況であったことから、慎重工事とした。

第3節 調査経過

向ノ入山遺跡の発掘調査は6月1日から開始した。当初は、休憩所用地の造設を行い、終了後に伐根作業と表土除去に移行した。また、この時期に休憩所・仮設トイレ等を設置した。作業員を雇用した作業は6月11日から開始し、環境整備後に遺構検出を開始した。遺構の密度は高くなかったが、斜面部に遺物包含層が形成されるなど転落等の危険性があったため、作業にあたっては、安全面には十分に配慮した。

遺構精査は、調査区西部の尾根頂部で検出された竪穴住居跡と遺物包含層を優先し、順次東部へ展開した。調査は、遺物包含層の調査にめどが立った6月末には調査区東部に移っていくことになった。この地区からは竪穴状遺構や木炭窯跡・土坑・焼土・焼構が検出された。

6月後半から7月にかけては記録的な猛暑となった。この時期の作業は休憩をはさみながらとなり、作業効率は落ちていった。一方で、7月上旬には測量基準杭が設置されるなどして、遺構の記録が進捗することとなった。7月になると、遺構精査は竪穴住居跡と木炭窯跡を中心になっていった。竪穴住居跡の精査は、カマド焚口や煙道に石が多用されていたため記録に手間取ったが、7月末には調査を終了することができた。

7月後半には竪穴状遺構や土坑の精査に移り、順調に進捗した。7月18日には、工事側の協力を得てドローンを用いた遺跡の航空写真を撮影し、撮影終了後に遺構の断割り作業を実施した。こうしてすべての精査が終了したことから、7月31日には現地引き渡しを実施し、8月2日までに賃借物件を返却して、現地でのすべての作業を終了した。現地での作業日数は42日間であった。

(佐藤)

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要（図5）

向ノ入山遺跡の発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡1軒・竪穴状遺構1基・木炭窯跡1基・土坑4基・焼土遺構2基・遺物包含層1箇所である。遺跡は東西に伸びる馬の背状の丘陵尾根部と、これから南北に傾斜する斜面部にかけて立地するが、大部分の遺構は尾根部に分布し、遺物包含層は北側斜面に形成されている。検出された遺構の年代は、竪穴住居跡と竪穴状遺構・土

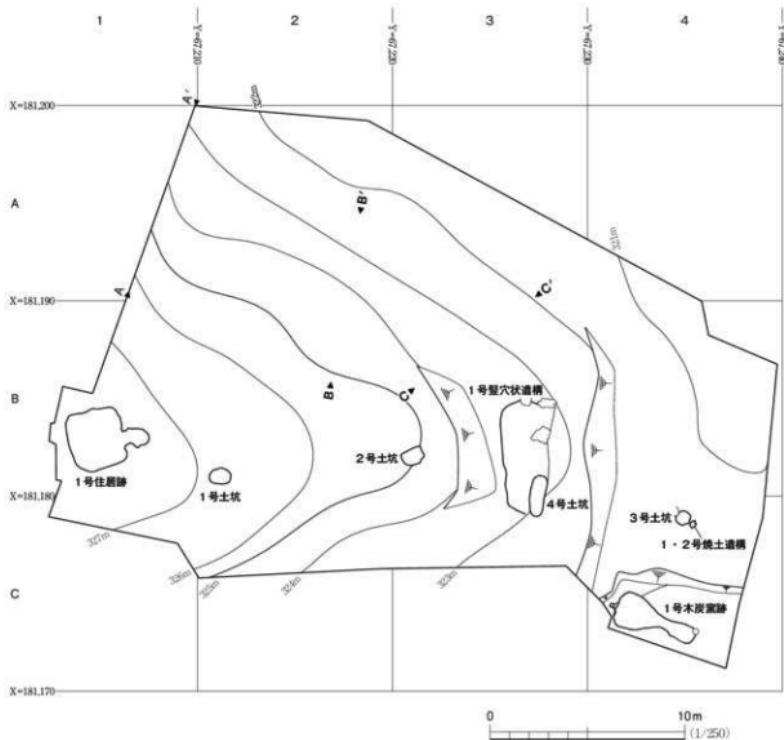


図5 遺構配置図

坑の一部が古代、遺物包含層と土坑の一部が縄文時代、木炭窓跡が近代以降と推定される。

出土遺物は、縄文土器1,129点・土師器257点・須恵器14点・陶器1点・石器・石製品74点・金属製品3点を数える。このうち縄文土器と石器・石製品は遺物包含層・土師器・須恵器は堅穴住居跡とその周辺からの出土が多数を占める。縄文土器は大部分が早期中葉の所産であり、石器・石製品も多くは該期と推定される。金属製品には堅穴住居跡から出土した古銭があるが、中世の所産で住居跡には伴わないことが判明している。

基本土層（図6、写真3）

調査区内における土層の堆積状況は地点により異なっている。尾根部では表土直下に基盤層が露呈するのに対し、北側斜面では基盤層まで1mを超える土層が堆積していた。この要因は、尾根部での腐植土層の形成が弱かったこととともに、尾根部の土層が斜面部に流出したことが考えられ

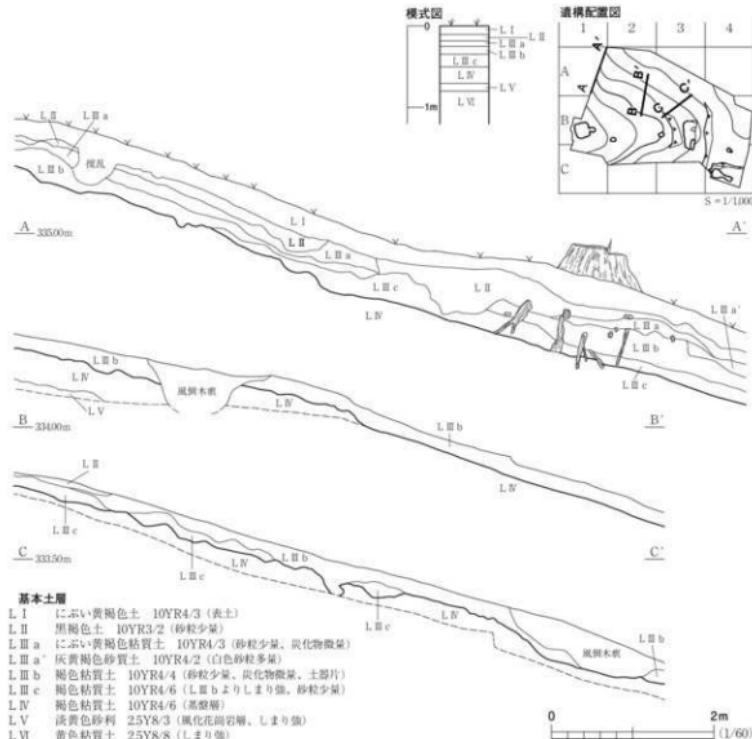


図6 基本土層

る。調査区内の複数箇所で観察したところ、以下に記する土層が確認された。

L I は表土層である。15~40cmで堆積しており、斜面部が厚い。L II は風化花崗岩に由来する砂粒を含む黒褐色土で、斜面部にのみ堆積し、地点により層厚が異なる。少量の遺物を含む。L III は比較的明るい色調を呈する粘性のある土層で、北側斜面のはば全面に分布して遺物包含層を形成する。色調や含有物から、4層に細分される。L III a は黄色みが強い土層で、砂粒や炭化物をわずかに含む。もっとも厚い部分で30cm堆積する。本層から縄文土器がわずかに出土した。また、調査区北西端では白色砂粒を多量に含むL III a'に類似した土層が確認されており、これをL III a'とした。

L III b は炭化物を含む褐色粘質土で、縄文時代後晩期の土器片が本層から出土した。L III c はL III b より黄色みがあり、しまりも強い層で、L IV との漸移的な土層である。調査区西部に厚く分布し、東部に薄く堆積する傾向が見られた。本層からは比較的多くの縄文土器が出土するが、そのすべてが早期中葉の所産である。L IV は褐色粘質土で、遺構は本層上面で検出されている。本遺跡の基盤層で、最上面からわずかに縄文土器が出土する。

調査区南東端に位置する木炭窯跡周辺では、L IV 以下の土層が検出面や底面に確認されたことから、これらの土層を補足的に説明する。L V は風化花崗岩に由来する淡黄色砂層で、花崗岩の硬い部分が帯状に堆積している。1号木炭窯跡の西半部ではL IV が削平されており、本層上面が遺構検出面となっている。L VI は黄色粘質土が露出しており、1号木炭窯跡の底面が本層中に構築されている。

(佐藤)

第2節 堅穴住居跡

堅穴住居跡は、調査区西端の尾根から1軒検出され、出土遺物から、その年代は平安時代と考えられた。調査区の西方には平坦面が続いていることから、住居跡は調査区外にも数軒存在し、本住居跡とともに小規模な集落を形成していたと推定される。

1号住居跡 S I 01

遺構(図7・8、写真4)

本遺構は、調査区南西端のB 1 グリッドに位置し、尾根頂部に立地する。平成29年度に町教委が実施した確認調査8Tから検出された堅穴住居跡である。遺構検出面は、表土直下のL IV 上面である。

遺構内堆積土は19層に細分された。このうち ℓ 1・2は住居中央部の凹地に堆積する、やや黒みが強い土層である。混入物も多くなく、自然堆積と考えられる。一方、L IV塊・L IV粒を多量に含む ℓ 3・4・7は人為的に埋め戻された可能性が高い。 ℓ 4には少量ながら炭化物が含まれている。また、遺構中央部に堆積する ℓ 14も、混入物や層理面の角度から人為堆積と判断した。なか

でも ℓ 14は、遺構北東部で層理面がほぼ垂直に立ち上がり、別遺構と考えられたほどであった。 ℓ 13は焼土粒と炭化物を多量に含み、明らかな人為堆積を示す。 ℓ 15~19はいずれも褐色土である。これらの土層は、周壁の検出時に難儀するほどLIVに極めて類似していた。このうち ℓ 17は広範囲に厚く堆積し、 ℓ 18は遺構の中心近くまで堆積するなど、これらの土層が周壁の崩落土とは考えにくい。住居周辺に積まれていた周堤や土壁が住居廃絶時に意図的に崩され、その構築土が住居内に投げ込まれて堆積した土層の可能性を考えている。

本遺構は、平面形が方形を呈し、東辺にカマドをもつ住居跡である。規模は東西辻288m、南北

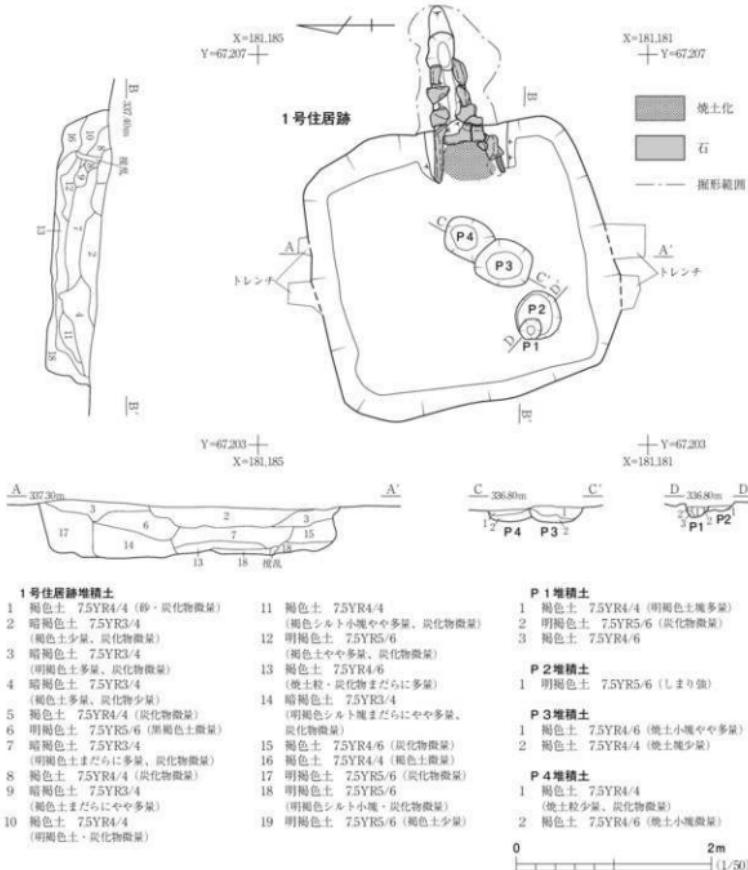


図7 1号住居跡（1）

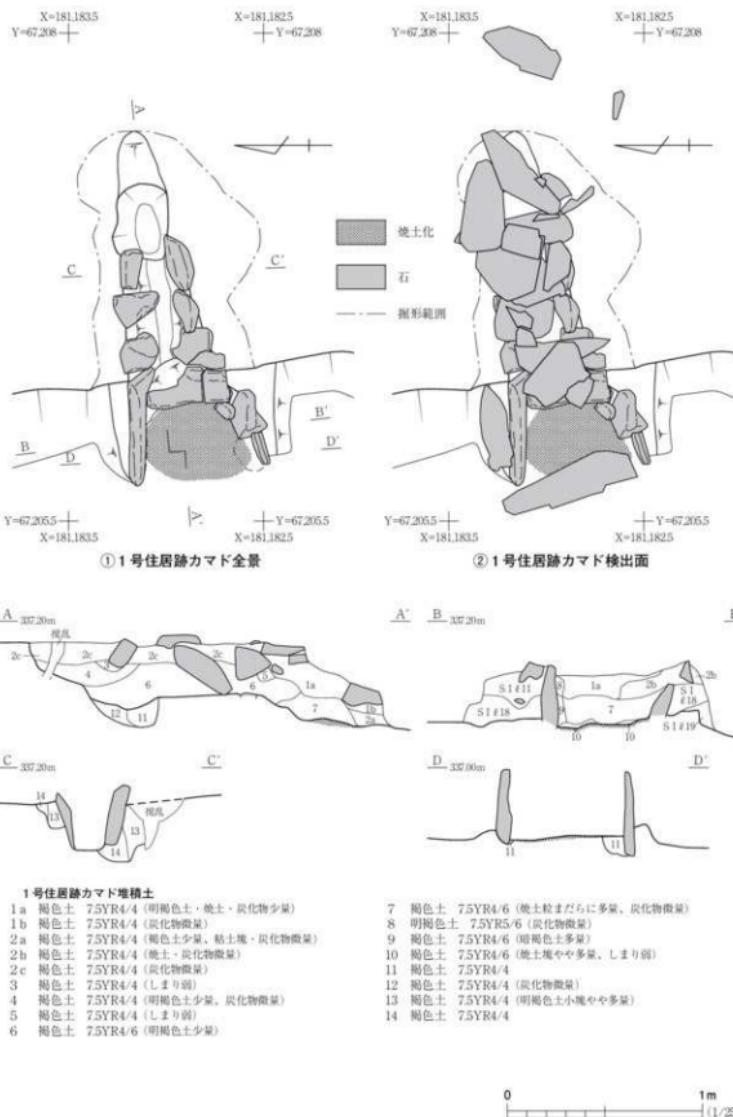


図8 1号住居跡（2）

辺3.05m、検出面からの深さは59cmある。床面はLIVに達し、平坦でなく凹凸が見られる。住居の付属施設として、小穴とカマドが検出された。小穴は4個ある。このうち、柱痕状の土層が観察されるP1は柱穴の可能性があるが、住居跡内にこれに対応する他の柱穴は検出されていない。P3・4はカマド前面に位置する小穴で、焼土や炭化物を含む。カマドに関連した施設と考えられるが、具体的な使用法を示す所見は得られていない。

カマドは、東辺の中央からやや南に寄った地点に位置する。カマドは燃焼部と煙道部からなり、煙道天井部に架けた構築材が検出されるなど、遺構の遺存状況は良好である。燃焼部から排煙部までの規模は、全長1.81m、袖下端での最大幅1.11mを測る。燃焼部は、掘形に据えた石と地山の掘り残しで構築された袖が伸びて煙道部へ続く。袖内側の大きさは東西63cm・南北60~43cmあり、煙道側が狭まる。燃焼部の西端からは、長方形の天井石が住居側に落ち込んだ状態で出土していたことから、この石が焚口に架かっていたとみられる(図8②)。煙道部は、一回り大きな掘形側面に石を据えて補強し、その上に石や土器を敷いて天井としている。その規模は、長さ94cm・幅は25~30cmあり、燃焼部側が広く排煙口側が狭い。煙道部掘形はさらに16~47cm広く掘り込まれ、南辺が特に大きい。袖芯材と天井に敷かれた石は、薄く板状に剥離する石を素材としていた。調査区に隣接した露頭で、この石が地山層に含まれていることが確認されており、第1章第2節で述べた崩壊堆積物の可能性がある。

カマド内の土層は大きく14層に分けられ、ℓ1~10が遺構廃絶後の堆積土、ℓ11~14が掘形埋土と判断される。ℓ1~10はおおむね自然堆積と考えられるが、燃焼部に堆積するℓ7は混入物も多く、その上面から土師器杯と小型甕の破片が並んで出土したことから、人為堆積の可能性がある。また、袖や天井部は粘土を貼り付けて密封性を高めていたと考えられるが、粘土の痕跡は確認できなかった。

遺物(図9・10、写真9)

本遺構からは、縄文土器21点・土師器239点・須恵器14点・石器5点・金属製品1点が出土した。図示しなかった遺物も含めて、土師器杯は6個体以上、土師器甕は7個体以上、須恵器甕は4個体以上出土している。

図9-1・2は土師器杯で、どちらもロクロ成形で内面黒色処理されている。図9-1は検出面とカマドℓ7から出土した破片が接合した。カマドℓ7中からは、底部が上を向いた状態で出土している。底部が比較的大きく、回転糸切りの後回転ヘラケズリが施される。回転ヘラケズリは体部下端にも観察される。同図2は1と比べ底部がやや小ぶりで、体部に手持ヘラケズリが観察される。3は土師器の小型甕で、1とともにカマドℓ7から出土した。やや寸詰まりの器形である。川俣町雁ヶ作B遺跡に類例がある(川俣町1976)。4・5は土師器のロクロ成形の甕を図示した。4は体部が直線的に立ち上がる器形の甕で、口縁部から体部上半が残存する。体部には粘土の付着が観察できることから、カマドに据えられていた可能性が高い。5は体部がふくらむ甕である。6~8は須恵器を図示した。6・7は大甕で、6が体部下半、7が体部肩部の資料である。7はカマド

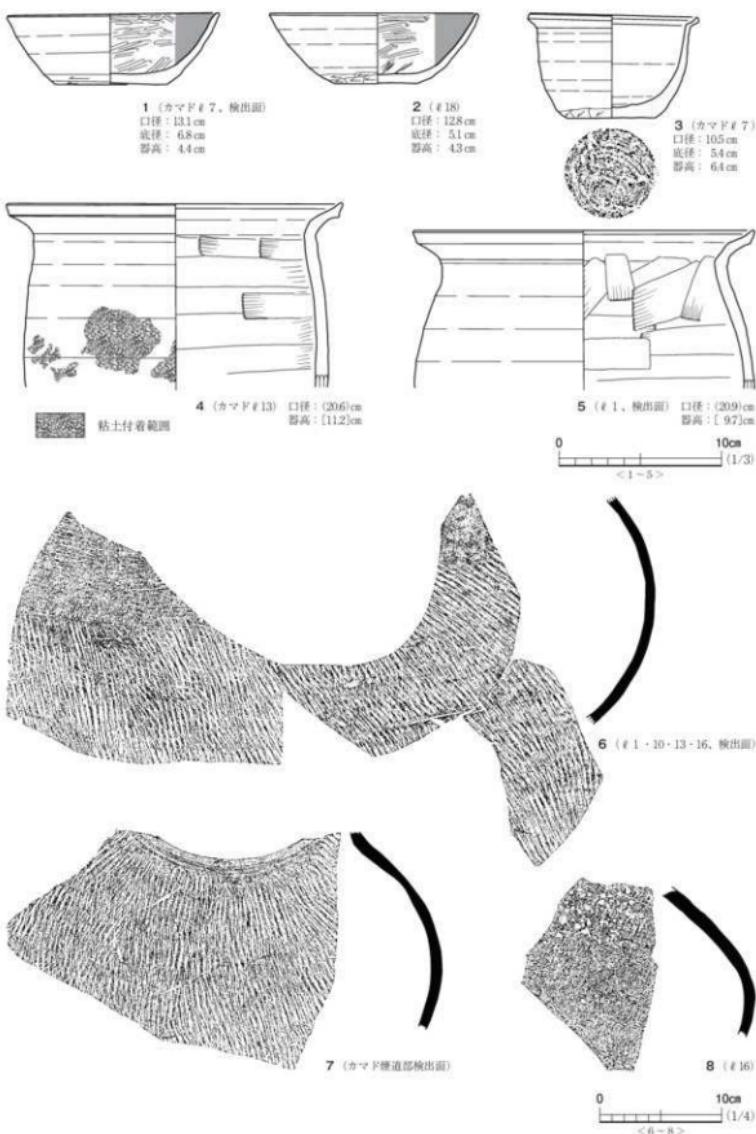


図9 1号住居跡出土遺物（1）

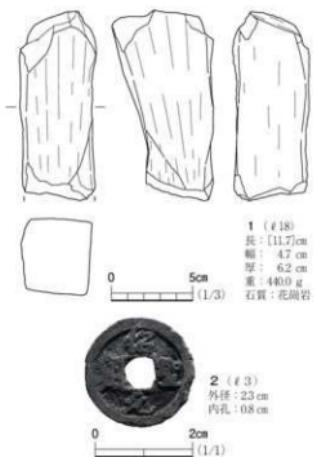


図10 1号住居跡出土遺物（2）

で、町内では、煙道側面や天井を石や土器で補強した梅庭遺跡I区S 14（川俣町教育委員会2001）の例がある。

（渡辺・佐藤）

まとめ

本住居跡は、東辺にカマドが付属する小型の住居跡である。出土した土器から、その年代は9世紀前半と考えられる。床面に明確な柱穴がなく住居上屋の復元が困難だが、周壁際の堆積土の観察から、土壁による壁立構造と想定することも可能である。

カマドは、構築材として石が多用された特徴的な構造

第3節 堪穴状遺構

堪穴状遺構1基が、調査区東部の尾根上から検出された。この遺構は、平面形や床面が整えられていることから堪穴住居跡の可能性が高いが、遺存状態が悪くカマド等の付属施設も検出されなかったことから、住居跡との確証が得られなかった。そこで、堪穴状遺構として報告する。

1号堪穴状遺構 S X 01（図11、写真5）

本遺構は、標高323～324mの調査区中央よりやや東側のB 3・C 3グリッドの尾根上に位置する。遺構検出面はL IV上面である。4号土坑と重複関係にあり、本遺構が新しい。

平面形は、楕円形を呈している。東壁側が削平により消滅している。規模は長軸5.8m、短軸2.3m、深さは、西壁側で45cmを測る。遺構内堆積土は7層からなる。ℓ 1～5は斜面上部からの流れ込みの状況を呈し自然堆積であることが観察される。ℓ 6・7については、西壁際の溝状構造内と底面の一部に認められた土層であり、いずれも黄褐色系の土色である。しまりが強く炭化物粒が混入し人為的堆積であると推察される。また、底面で確認されたℓ 7の範囲は、重複関係にある4号土坑を覆う状態であったことから貼床の充填土と認識している。壁は、西壁から北壁は急傾斜で立ち上り、南壁は端部で消滅している。底面は平坦で、西壁際中央に長さ1.7m、幅15cm、深さ

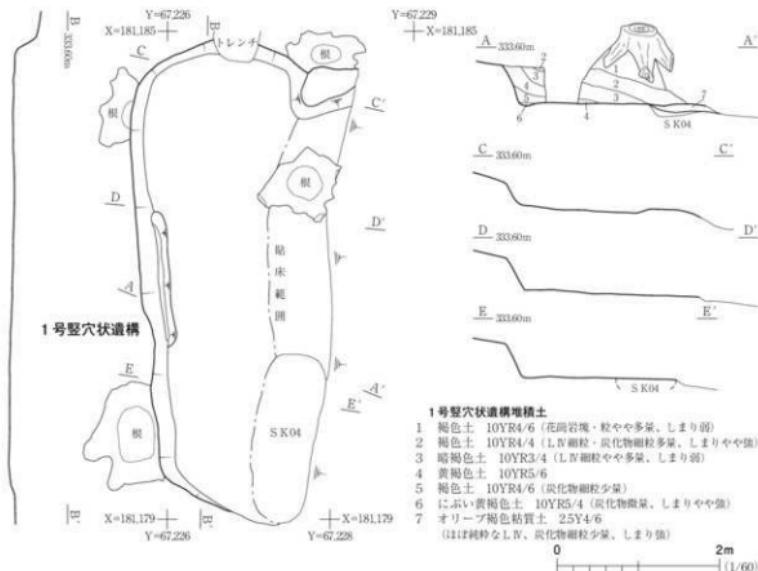


図11 1号竖穴状遺構

10cmを測る溝状遺構がある。本遺構からは土師器1点が出土しているが、小片であり、正確な年代は不明である。ただし、重複する4号土坑が平安時代初頭頃と考えていることから、それ以降に構築された竖穴住居跡の残存部であると考えられる。

第4節 木炭窯跡

調査区南東端から、木炭窯跡が1基検出されている。年代的には新しい時代の所産と推定されるが、構築法などに特徴的な所見が得られたため、本節で報告する。

1号木炭窯跡 S C 01 (図12、写真6)

本遺構は、調査区南東隅のC 4グリッドに位置し、地形的には馬の背状平坦面の端部に立地する木炭窯跡である。本遺構は、確認調査45Tで発見され「土坑」として報告されていた。ところが、遺構が西方および南方に大きく広がることが判明した。そこで調査区を拡張して検出作業を行った結果、木炭窯跡と判明した。遺構検出面はおおむねL IV上面で、遺構西部のみL V上面で検出されている。

遺構内堆積土は9層に細分された。このうち①～⑥が採業後の窯の天井と周壁の崩落土を主体

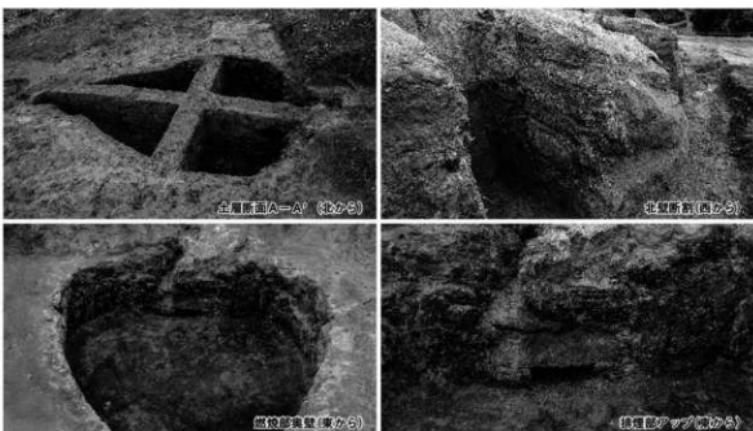
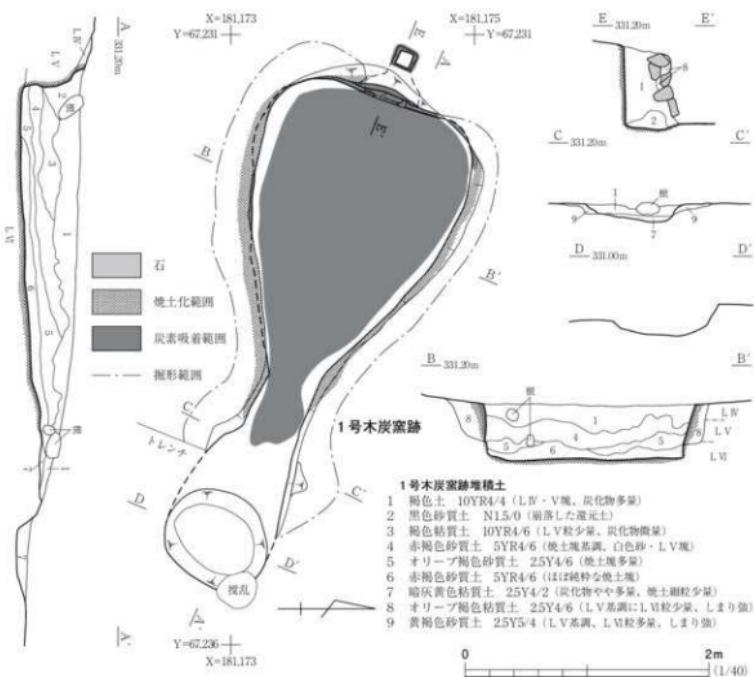


図12 1号木炭窯跡

とする土、 ℓ 7が操業時ないし廃絶直後の堆積土、 ℓ 8・9が木炭窯構築時の貼土と判断している。 ℓ 2・4～6にはLV・V塊や焼土塊などが多量に含まれる。特に奥壁際に堆積する ℓ 2は、焼けて青灰色を呈する地山の塊であり、明らかに天井ないし周壁が崩落した土層である。これに対し、混入物の少ない ℓ 1・3は周辺からの流入土に天井崩落土が混じる状況を示していると考えられる。焚口部と作業場に堆積する ℓ 7は暗灰黄色土で、炭化物が焼き出された後に堆積した土層と推定している。 ℓ 8・9は掘形内埋土である。掘形は現況の窯跡周壁より大きく掘り込んでおり、ここに花崗岩細粒を含むLV基調の ℓ 8・9を硬く貼り付けることで周壁を形成しているため、地山との区別は難しかった。これらの土層はしまりが非常に強い。また、 ℓ 8は被熱による赤化が著しく、20cm程度の厚さで赤化している地点も少なくない。

本遺構は、排煙部・燃焼部・焚口部・作業場からなり、主軸は北西－南東を指す。全長4.71m、最大幅1.81m、検出面から最も深い箇所で52cmを測る。遺構の平面形は、円形土坑状の作業場からいったんすばまり焚口部を経て燃焼部に至る。燃焼部の平面形は、側壁が丸みをもってふくらんだのち、奥壁が直線的となる形状で、いわゆる「いちじく形」を呈している。

燃焼部は長さ2.30mを測り、最大幅は奥壁直前で1.81mを測る。底面は焚口に向かって緩やかに上がっていくが、平坦に整えられている。周壁は急峻に立ち上がり、部分的には垂直に立ち上がる箇所も見られる。底面と周壁のはば全面が被熱しており、特に周壁では厚さ20cm以上にわたり硬く焼きしまった箇所もある。

排煙部は奥壁中央に位置し、排煙口と煙道からなる。燃焼部底面に柱状に据えた石の上面に天井石を架けて排煙口とし、この上に石と構築土を貼ることで壁とし煙道を確保する構造である。排煙口の大きさは幅20cm、高さ10cmを測る。煙道は、幅約20cm、奥行き45cmに地山を直線的に掘り込んだ部分のうち、奥行き約20cmの範囲が機能したと推定される。

焚口部は、燃焼部付近で幅を狭めわずかに広がって作業場に至る。作業場は、径86×74cmの土坑状を呈する。焚口部および作業場部分には天井崩落土である ℓ 5・6は分布していない。

本遺構から出土した遺物は、土師器1点・陶器1点・石器4点である。陶器は、 ℓ 2から出土した土管ないし瓦で、表裏両面に鉄軸が施されていることから、近代以降の所産とみられる。

本遺構は、いわゆる「いちじく形」の平面形を呈し、奥行きが狭い燃焼部に石を多用した排煙部が付属する木炭窯跡で、その年代は、出土した陶器から近代以降と考えられる。これまで近代以降の年代が与えられた木炭窯跡について、本来調査・報告を要しない遺構とされていた。しかし、近年、年代的に新しいとされた木炭窯跡の中に中世から近世まで遡る例が存在することが複数報告され、その構成要素も多様であることが判明してきている(伊達市行合道B遺跡・平田村煙石F遺跡・須賀川市関林H遺跡など)。従来のように、平面形のみで木炭窯跡の年代を決定することは困難になってきていることから、本書では年代の明らかな木炭窯跡の一例として、本遺構を報告した。

第5節 その他の遺構

本節では、その他の遺構として土坑と焼土遺構を報告する。いずれも尾根筋に沿って分布している。このうち、3号土坑と焼土遺構は近接して検出されており、どちらも焼土面が形成されていることから、年代や性格が共通する可能性がある。

1号土坑 SK 01 (図13、写真7)

本遺構は、確認調査9Tで検出された土坑である。調査区西側のB2グリッドに位置し、1号住居跡に隣接する。他の遺構との重複関係はない。検出面はLIVである。遺構内堆積土は、褐色土の2層で自然堆積土と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸95cm、短軸82cm、深さ40cmを測る、やや小型の土坑である。底面はほぼ平坦であり、周壁は急峻に立ち上がっている。出土遺物はない。

2号土坑 SK 02 (図13・14、写真7・9)

本遺構は、調査区中央のB3グリッドに位置し、1号竪穴状遺構の約4m西側に隣接する。他の遺構との重複関係はない。検出面はLIVである。遺構内堆積土は、にぶい黄褐色土の1層で自然堆積土と判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸110cm、短軸82cm、深さ40cmを測る、やや小型の土坑である。底面はほぼ平坦で、周壁は急峻に立ち上がっている。遺物は、図14-2に示す二等辺三角形を呈する石鏃が1点と剥片1点が出土している。

本遺構は尾根上に設けられた小型の土坑であり、唯一遺物が出土した遺構である。出土した石鏃が、縄文時代早期中葉に特徴的な形状を呈することから、本遺構の年代は縄文時代早期中葉の可能性が高い。

3号土坑 SK 03 (図13、写真7)

本遺構は、調査区東側のC4グリッドに位置し、1・2号焼土遺構に隣接する。他の遺構との重複関係はない。検出面はLIVである。遺構内堆積土は、炭化物を多く混入する暗褐色土の1層で自然堆積土と判断した。平面形は、一部が木根により破損しているが円形を呈する。規模は、径70cm、深さ8cmを測る。底面は、ほぼ平坦であり、中央部に焼土が確認される。周壁は緩やかな立ち上がりである。出土遺物はない。

本遺構は、規模と中央部に認められる被熱痕跡から、鍛冶遺構の可能性が指摘される。周辺からは、鉄滓も出土している。出土遺物がなく機能時期は不明であるが、1号竪穴状遺構を壊すカット面に位置することから判断すれば、平安時代以降と考えている。



図13 1~4号土坑

4号土坑 SK 04 (図13・14、写真8・9)

本遺構は、調査区東側のB3・C3グリッドに位置し、1号竪穴状遺構と重複関係にあり、本遺構が古い。検出面は1号竪穴状遺構の貼床土を除去した後のLIVである。遺構内堆積土は、炭化物が壁際にブロック状に観察される黒色土の1層で人為的堆積土と判断した。平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸2.1m、短軸75cm、深さ15cmを測る、大型の土坑である。底面は、ほぼ平坦で、残存する周壁は緩やかな立ち上がりである。

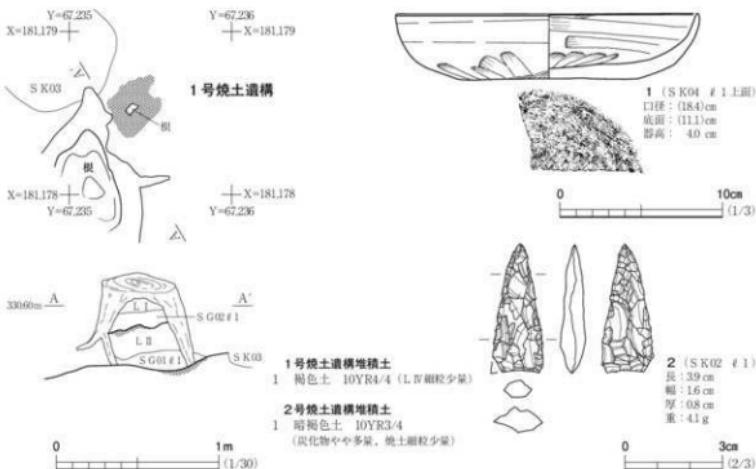


図14 1・2号焼土遺構、2・4号土坑出土遺物

遺物は、土師器杯が1点出土している。図14-1は平底風でいくぶん大型の杯で、口縁部は底部から直線的に立ち上がり皿状を呈する。器面調整は口縁部にヨコナデ、体部から底部にはヘラナデが施され、底部には部分的にミガキが確認される。体部内面はヘラナデである。

本遺構の機能時期は、出土遺物から8世紀末から9世紀初頭頃と考えられる。遺構の性格は、堆積土の状況から木炭焼成坑の可能性があるが、明確な性格は不明である。

1号焼土遺構 SG 01 (図14、写真8)

本遺構は、調査区東側のC 4グリッドに位置し、3号土坑に隣接する。2号焼土遺構と上下関係で重複し、本遺構が古い。検出面はL IVである。遺構内堆積土は、褐色土の1層で自然堆積土と判断した。平面形は、不整の方形を呈する。規模は、長軸65cm、短軸55cm、深さは堆積土厚で24cmを測る。底面は、緩く窪み、被熱により焼成化している。出土遺物はない。本遺構の所属時期および性格は不明である。

2号焼土遺構 SG 02 (図14、写真8)

本遺構は、調査区東側のC 4グリッドに位置し、3号土坑に隣接する。1号焼土遺構の上部に位置し、本遺構が新しい。検出面はL IIである。遺構内堆積土は、炭化物が混入する暗褐色土の1層である。堆積の要因は不明である。断面での確認であることから平面形および全体の規模は、不明であるが、被熱による焼成化範囲は、長さ25cm、厚さ2~4cmを測る。底面には、凹凸が確認される。出土遺物はない。本遺構の所属時期および性格は不明である。

第6節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器1,108点、土師器15点、石器・石製品63点、金属製品2点がある。これらの大部分は調査区北部の斜面に形成された遺物包含層から出土しており、これ以外の出土例は極めて少ない。また、土師器・須恵器は1号住居跡周辺からのみ出土している。層位的にはLⅡからLⅣにかけて出土するが、LⅢ出土が大半を占めている。

本節では、遺物包含層から出土した資料や平成29年度に実施した確認調査で出土した資料も含めて、遺構外出土遺物として報告する。以下に種別ごとに記述していくが、縄文土器については必要に応じて分類して説明する。

縄文土器（図15～18、写真10～14）

縄文土器は、早期中葉・前期初頭・後期中葉・晚期の土器が出土しており、早期中葉に属する土器片が大部分を占めている。したがって、早期中葉とそれ以外の時期の土器片に大別し、早期中葉の土器片についてはさらに細分して説明する。

第1群土器

早期中葉の土器群で、土器型式としては、田戸下層式・田戸上層式・常世1式に分けられる。

1類（図15-1～7） 田戸下層式に比定される一群で、1が口縁部、2～7が胴部片である。1は平行沈線による区画内に貝殻腹縁文が充填されている。平行沈線は浅く施文されることや口唇部に刺突が施される等の特徴から、田戸下層式でも新しい段階に比定される。これに対し同図2～7は沈線が太く、強く引いて施文されるなど、1よりは先行する技法で文様が描出されている。3の沈線で引かれた区画内には、円形のモチーフが観察される。

2類（図15-8～18、図16-11～13、15～17） くびれをもつ器形や、平行沈線や波状沈線・刺突文を多用した文様を特徴とする土器群で、田戸上層式とこれに並行する時期に比定している。口縁部下のくびれは、比較的強い例（9）とゆるい例（11・12・15）の2者がある。文様は、沈線（11）や刺突文（10）で山形ないし三角形のモチーフが描かれるなど、田戸上層式の特徴をよく示している。

図15-8は胎土に微量の纖維混和痕が観察される。口唇直下が隆起状に肥厚し、肥厚部に沿った2列の連続刺突文が施される。この刺突列の下位には、条痕地に複数の斜行沈線が引かれる。文様は内面にも見られ、絡条体圧痕文が口唇直下に施文される。同図16-18は外面が灰黄色、内面が黒褐色を呈する同一個体である。本類に比定した土器とは、胎土や焼成が異なっていることから、搬入品と考えている。口唇部が大きく広がり、突出した内外面端部に棒状工具、窪んだ口唇部に円形工具による刺突文が観察される。文様は貝殻腹縁文で描出され、重疊した区画内に大形の山形文が連続する。東北地方北部の影響が推定されるが、管見では類例を見出すことができない。

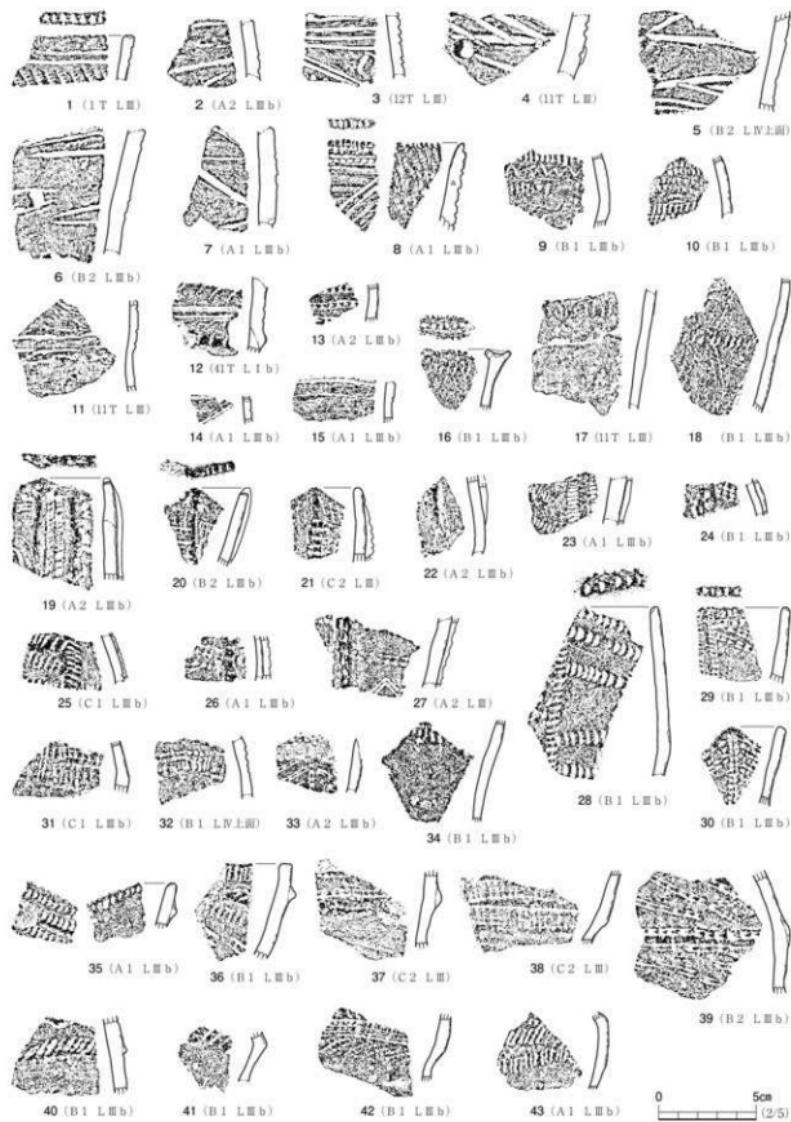


図15 遺構外出土遺物（1）

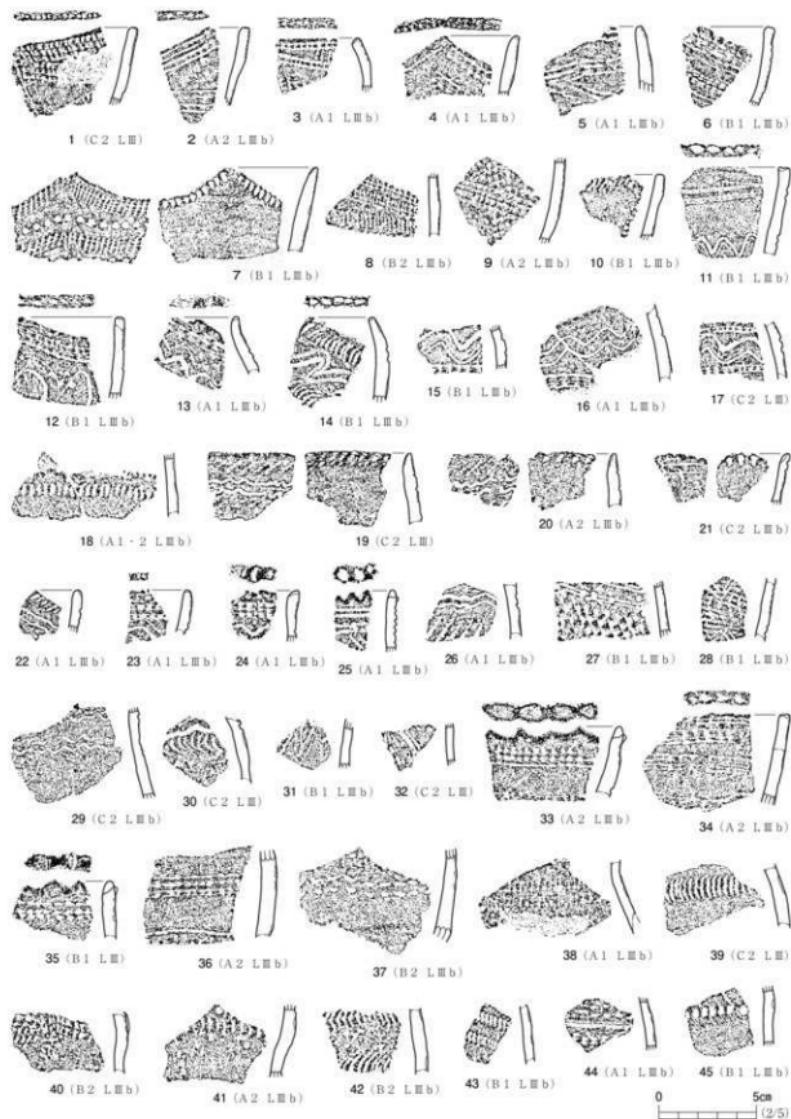


図16 遺構出土遺物（2）

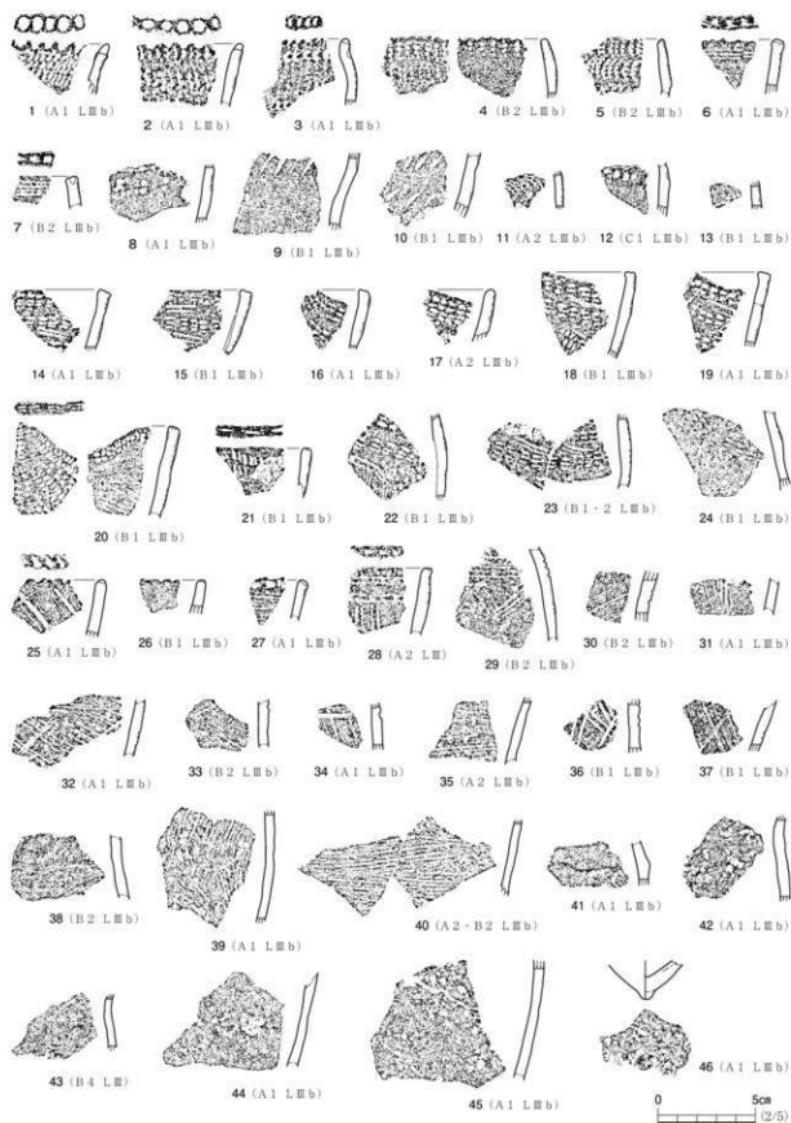


図17 遺構外出土遺物（3）

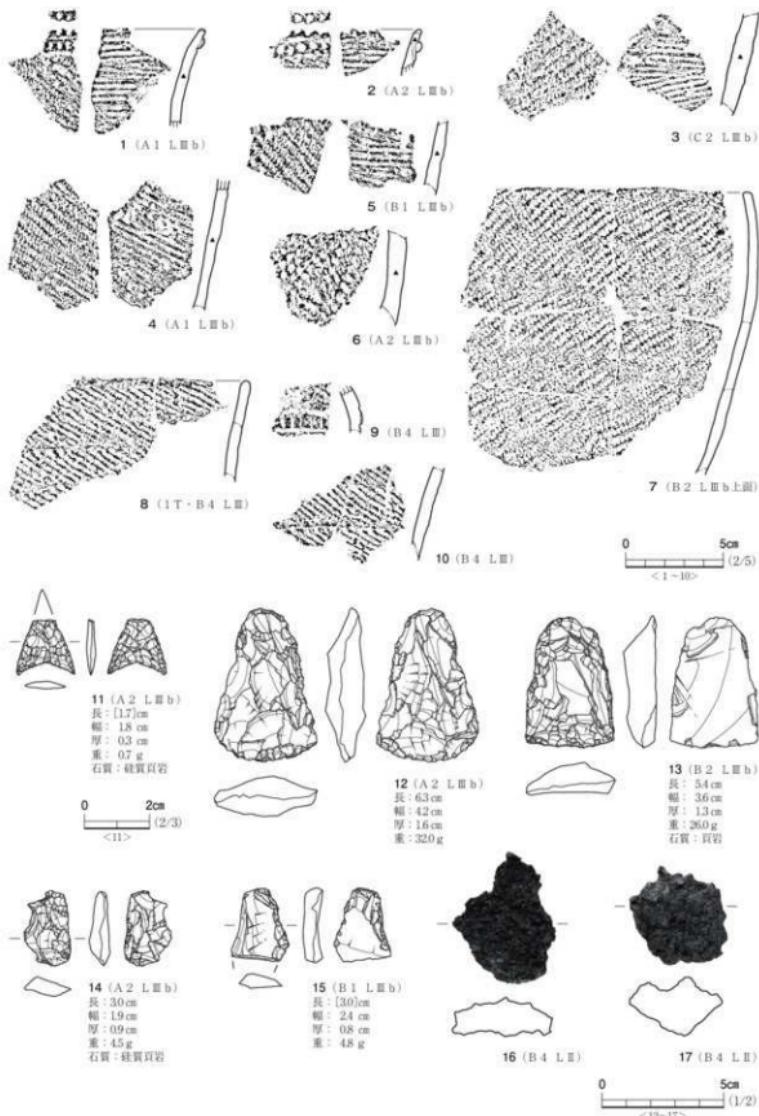


図18 遺構出土遺物（4）

図16-11～13、15～17は区画文内に波状沈線が施文される土器をまとめた。波状沈線は、その間隔が広く沈線も比較的しっかりと引かれており、3類の波状沈線とは明確に区別できる。図16-11～13が口縁部片で、口唇部に施文された刺突文も田戸上層式の特徴をよく示している。

3類(図15-19～図16-10・14・18～図17-24) 常世1式に比定される土器群。貝殻文・刺突文・沈線文・絡条体などで文様が描かれるが、施文具の区別が困難な場合も多い。文様構成から細分可能である。

a種(図15-19～34、図17-20) 縦方向の区画が観察され、区画内に矢羽状や横に連結するモチーフが描かれる一群である。このうち図15-19～27には隆帯が垂下している。隆帯の脇に刺突文が沿うもの(19・20・23)、隆帶上に刺突文が伴うもの(21・24～27)、隆帶を無文とするもの(22)などがある。同図28～34は刺突文で縦に区画する一群である。

縦の区画に挟まれた空間には、波状沈線(19・22)・直線列(19・20)・斜行列(23・28～30・33、図17-20)があり、比較的多様性に富んでいる。また刺突文は、押し引かれて有筋沈線化することもある(19・23・24など)。図17-20は図15-28類似の文様が絡条体で施文されており、絡条体間には押引文が多段に描かれている。本種の多くは、文様に田戸上層式の影響が残っていることから、常世1式でも古い段階とみられる。

b種(図15-35～43、図16-21・25・45) 横方向の区画が観察される一群で、図15-35～41が隆帯、同図42・43が刺突文で区画されている。35・36が口縁部片で、口縁を巡る刺突列直下に横走する隆帯が展開する。35は隆帯脇、36は隆帶上に刺突文が施されている。37～43は文様帯下端の区画文が観察され、37・39～41が隆帯、42・43は押引文が施されている。また、38・41は区画文下が屈曲して隆帯状になっている。

文様は、36・39が斜行するモチーフ、40に波状沈線がそれぞれ展開し、39には区画下にも斜行文が観察される。施文具は櫛齒状工具(36～38・40～43)が多用され、竹管状工具(36・39・40)もある。このうち39は、大形の山形文とみられる多段の斜行モチーフが施文される。モチーフを描く押引文は間隔が広く、区画下の短沈線とともに古めの様相を残していることから、田戸上層式に近い年代が考えられる。

図16-21は口縁直下に区画沈線と貝殻腹縁文が施される。同図25は平行沈線で区画文や斜行モチーフが観察される。どちらもあり類例がない土器といえる。45は口縁部文様帯下端を刺突文で区画している。

c種(図16-1～10) 押引文や刺突文で描出された帶文部により、単純な幾何学文や層疊する波状文様が展開するもの。区画内に貝殻腹縁文が充填される例もある(3)が、その割合は少なく、d類～f類とともに文様の退化がうかがえる土器群である。文様は押引文が主体を占め、沈線文や単独の刺突文は少なくなる。

図16-1～3・5・10には三角形のモチーフが展開するが、充填文は少ない。1は垂下沈線で区画された部分に押引文による三角形のモチーフが描かれており、類似する三角形のモチーフは5

にも観察できる。4・6～8は押引文や、これに沿う沈線(6)や刺突文(7)が帯状に層疊し、文様の横方向への指向が強くなっている。

d種(図16・14・18～20・22～24・26～31) 押引文や平行沈線を用いた波状沈線で多段の文様を描く土器群。2類に見られた同様の土器とは、押引文が密に施文されたり波状沈線が雜に施文されるなど、退化傾向がうかがえる一群である。14は波状沈線の間隔が密で、やや雜な印象を受ける。18の波状沈線は浅く施文される。19・20は内削状の口唇部内面に刺突文が施される。描かれる沈線文は比較的深いが、波が低く直線的になっている。同様の沈線は22・24・26・29にも観察できる。29の波状文は多段に施文されている。

e種(図16・33～44) 主に押引文を描線として、横走する帯状部と無文部が交互に配される土器群。文様の単純化が進んだ一群といえる。33～35は口縁部片で、口唇部に刺突が施される点で共通する。これに対し、37～41は文様帶下端の区画文である。文様は櫛歯状工具の押引文で直線的に、37・44は間隔をあけた連続刺突文が施文される。

f種(図17・1～13) 刺突文あるいは押引文のみ観察される土器群。このうち図17・1～7は密な刺突文が多段に施文される。8～10は比較的大ぶりの刺突文が観察できる。特に9・10は大きめの爪形工具が用いられている。また、12・13は丸棒状工具の刺突文で文様帶を区画しており、こうした刺突文は該期の特徴をよく示している。

g種(図16・32、図17・14～19・21～24) 特殊な押引文や刺突文で文様を描く土器群で、沈線や短沈線を併用することもある。このうち、図17・14～16・22・23は器面の色調や文様から同一個体と考えられ、図16・32もその可能性がある。2～3本単位の棒状工具による刺突文列に短沈線が沿う、特徴的な文様が展開する。モチーフは横走ないし斜行し直線的であるが、曲線的な部分(図16・32、図17・22・24)も観察される。同様の文様は、波状口縁の18・19にも観察される。21は角頭状工具で引いた縱長の刺突列が多段に施文される。

本種の多くは3類土器(常世1式)に位置付けられるとみられるが、図17・14～16・18・19・22・23などは類例が少なく、2類土器(田戸上層式)に含まれる可能性もある。

4類(図17・25～46) 早期中葉に比定される粗製的な土器。

a種(図17・25・27～37) 沈線のみ施文されるもの。田戸上層式から常世1式に属すると考えられる。このうち比較的大く施文される25・34、波状モチーフが観察される29などは2類土器に伴う可能性が高い。これ以外は3類土器に属すると考えられる。

b種(図17・38～40) 条痕を地文とするもの。田戸上層式の条痕がやや幅広であるのに対し、本種は櫛歯状工具などで施文されたとみられることから、3類に伴うと考えたい。

c種(図17・26・41～46) 底部を含む無文の土器を一括する。26は角頭状の口唇部に刺突文が施されていることから、2類土器に比定されよう。41～45は胴部破片である。41は屈曲部が隆起状に盛り上がって文様帶を区画する。42・43は区画が消失し、胴部のくびれに退化している。これより下部は44・45を経て46に至り、いわゆる砲弾形を呈する。46は乳首状の突出部が見られる

底部である。41～46は3類土器に比定される。

第2群土器

図18－1～10は縄文時代前期以降の土器を一括した。前期初頭、前期前葉、後期中葉・晚期に比定されるが、出土数は少ない。

図18－1～6は前期に比定される一群である。胎土に纖維混和痕が観察される。1～5は外面には斜行縄文、内面に条文が施文される。1・2の口縁直下には隆帯が巡り、口唇部と隆帯上に刺突がなされている。早期末葉から前期初頭の土器群に位置付けられる。同図6は節がやや大きい縄文が施文されており、大木1式頃に比定できよう。

7～10は後晩期と考えられる土器群である。9は上下に沈線が沿う隆帯で文様帶を区画する加曾利B2式の深鉢とみられ、隆帯上には刺突が認められる。調査区東端から出土している。7・8・10は粗製深鉢で、7・8が口縁部、10が胴部片である。7は尾根肩部のB2グリッドから出土した。これらの厳密な時期を推定するのは困難だが、9に近い年代が推定される。この他、晩期の粗製土器もわずかに出土したが、図示しなかった。

その他の遺物（図18－11～17、写真15）

ここでは土器以外の遺物を一括する。11は凹基盤で、先端部を欠損する。12・13は箆状石器である。いずれも珪質の強い石材を用いている。12は両面加工で整形されており、刃部が広く基部は細い撥形を呈している。これに対し13は片面加工で長方形に整えられている。こうした石器は縄文時代早期から前期にかけて見られる。14・15は剥片で、表裏両面に調整が観察できる。17・18は鉄滓である。いずれも調査区東部のB4グリッドから出土している。年代は不明だが、近隣から検出された木炭窯跡や焼土遺構に関係する遺物の可能性がある。

（佐藤）

第4章 まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡1軒、堅穴状遺構1基、木炭窯跡1基、土坑4基、焼土遺構2基、遺物包含層1箇所が確認された。また、出土した遺物から本遺跡では縄文時代・平安時代・中世・近代において、人々の痕跡が確認された。本章では今回確認された時代ごとの変遷を記述し、本遺跡のまとめとする。

本遺跡で確認できた最初の痕跡は、縄文時代早期中葉である。土坑1基(2号土坑)と遺物包含層が確認された。特に、遺物包含層からは当該期の資料が多数出土した。

これらの資料は、沈線文や刺突文・押引文を主たる描線とし、各種のモチーフが施文される。沈線文系土器後半の土器で、型式名としては田戸下層式・田戸上層式・常世1式であり、それぞれ第1群1~3類に分類した。数量的には3類とした常世1式の割合が高い。施文されるモチーフは、入組文から変化した山形文や幾何学文のほか帶状の文様があり、その多くは田戸下層式以来の文様変遷で説明できる。

図19は、常世1式の主文様変遷を示した図である。重視したのは文様展開であり、「大型山形文(系土器)」・「縦区画横位連結文(系土器)」・「横位多段施文(系土器)」と仮称する3種に分けた。なお、図中の縦の破線は、時期的な段階を考慮しているが、各土器群の同時性を必ずしも示すものではない。

「大型山形文」は、「N」字状モチーフが展開するものを含む。1など田戸上層式の入組モチーフからの変化で、1の入組部が口縁部まで伸びることで成立すると考えられる。祖型となる入組文には、渦巻状モチーフの他、クランク状モチーフがある。この文様は2を経て3に変遷すると考えられる。2は田村市富作遺跡出土の深鉢で、文様帯を縦に区画する隆帶と斜方向に結ぶ隆帶によって、連続する「N」字モチーフが展開している。隆帶脇には波状の平行沈線が2段沿っている。3は胴部のくびれが弱くなる。文様は2に類似するが、文様描線が押引文となり波状沈線も主モチーフに沿わないなど、器形とともに2からの退化傾向がうかがえる。富作遺跡では、2より新しい年代とされる6層から、微隆起線文の土器が出土している。

「縦区画横位連結文」は、隆帶・沈線文・刺突文などで施文され、縦区画をはさんだ左右に文様が展開する土器群である。平口縁と波状口縁があり、波状口縁の場合、横位文様は綾衫状になる。この文様は、4のような文様からの変化と推定される。4は波状口縁の波頂部と波底部に縦方向の刺突文が確認され、これから派生する平行沈線文が展開する。常世1式期では5・6のように明確に区画されるようになる。6は直線と波状の沈線が3列垂下しており、2本の隆帶が垂下する図15~19と共通する。横位文様は、5が沈線と刺突文、6が平行沈線による直線と波状文が交互に施文されており多段化が進んでいる。一方7は、垂下する隆帶間に絡条体圧痕文を直線的に施文す

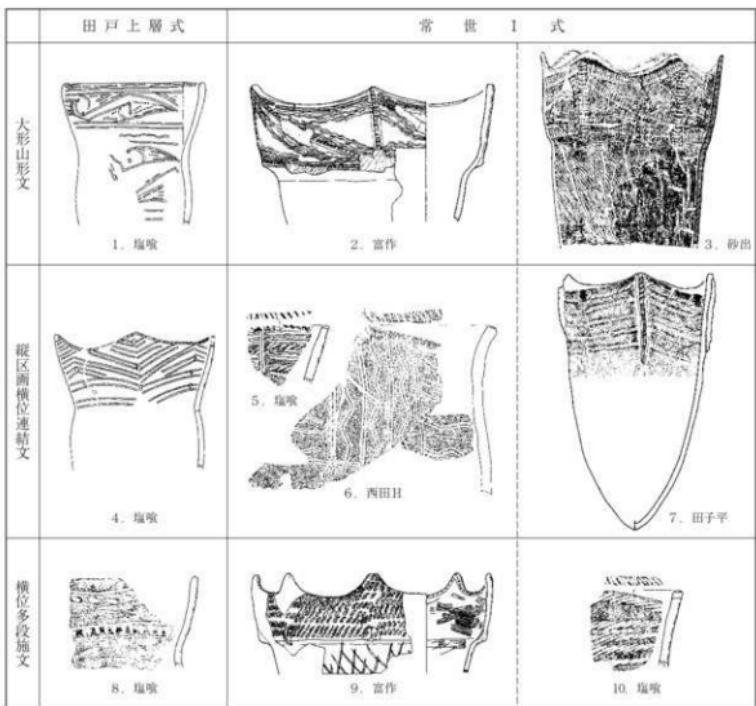


図19 沈線文系土器群終末の様相

(縮尺 1・2・4・9:1/5 3・7:1/6 5・6・8・10:1/4)

るなど、5・6より後出すると考えられ、三浦武司氏は子母口式に併行させている(三浦 2015)。

「横位多段施文」は、常世I式で主体を占める文様である。田戸下層式以来の文様の退化で説明でき、刺突文・押引文・沈線文などで施文されている。主に段やくびれで区画された口縁下の幅狭の文様帶内に施文され、胴部以下は格子目文(9)が施文される以外は無文とするのが一般的である。この文様は、10の「南原式」(芳賀 1992)に統くと考えられる。

以上が常世I式の主文様であるが、本遺跡出土の当該期の土器も上記の要素を有している。なかでも特徴的なのが、3類a種とした縦区画を有する一群が少なからず認められる点である。

3類a種の土器は、隆帶と押引文・刺突文などで区画施文され、隆帶を用いる例が目立つ。隆帶上やこれに沿って刺突文が施文される場合もある。隆帶は文様帶下端の区画に連結する例が多いとみられるが、区画に連結せず途切れる場合(図15-22)やクランク状モチーフを呈するもの(図15-25)もある。

早期中葉から終末期土器群の今後の課題としては、①常世I式土器の編年的位置付け、②田戸

上層式土器からの変遷、③櫻木式(野島式)土器との関連性があげられる。特に②については、県内の「田戸上層式」が関東地方の標識資料と異なるばかりでなく、これに「明神裏Ⅲ式」・「大寺式」等の東北地方南部の土器群がかかわることで複雑な様相を呈しており、その型式把握がいまだ不十分な状況が続いている。また、常世1式の成立に、東北地方北部の影響とする指摘もある(領塚1997)。今後、県内の田戸上層式段階の土器群の把握と、常世1式に継続する要素と消失する要素、新たに出現する要素の抽出などが重要な作業になると考える。

次の痕跡はわずかではあるが、縄文時代前期前葉と同後期および晩期である。いずれも遺物包含層から当該期の資料が確認できた。

次の痕跡は平安時代で、堅穴住居跡および堅穴状造構、それに土坑2基(3・4号土坑)がある。いずれも馬の背状の丘陵頂部に立地している。調査区外に延びる平坦面に遺構が存在する可能性もあるが、その場合でも小規模な集落しか想定できない。集落としては、8世紀末ないし9世紀初頭に形成されたものと思われるが、出土した宋銭から中世にも活動した痕跡は考えられる。

狹小な丘陵上に集落が営まれた理由としては、その眺望があげられる。本遺跡からは、広瀬川に沿った南北双方を臨むことができ、川俣町と二本松市針道を結ぶ街道と、山木屋地区と福島市飯野町大久保を結ぶ街道の交点にもあたり、交通の要所であったと考えられる。

最後の痕跡は、近代以降である。木炭窯跡が1基確認された。山間に展開した製炭作業が想定される。

(佐藤)

引用・参考文献

- 大熊町 1984 「砂出遺跡」「大熊町史」第二巻
- 川俣町 1976 「雁ヶ作B遺跡」「川俣町史」第2巻
- 川俣町文化振興委員会 2001 「梅庭遺跡発掘調査報告書II」川俣町文化財調査報告書第15集
- 縄文セミナーの会 2005 「早期中葉の再検討」
- 白石市 1976 「明神裏遺跡」「白石市史」別巻
- 芳賀美一 1992 「塙川町南原遺跡の縄紋土器」「福島考古」第33号
- 福島県文化振興事業団 2005 「西田口遺跡」「こまちダム遺跡発掘調査報告3」
- 福島県文化振興事業団 2010 「田子平遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告58」福島県埋蔵文化財調査報告書第461集
- 福島県文化センター 1986 「下谷地ヶ平B・C遺跡」「国営会津農業水利事業開拓遺跡調査報告IV」福島県埋蔵文化財調査報告書第164集
- 福島県文化センター 1989 「天光遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告5」福島県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 福島県文化センター 1994 「六郎次遺跡・塙噴遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告25」福島県埋蔵文化財調査報告書第296集
- 福島県立博物館 1986 「富作遺跡」福島県立博物館調査報告第13集
- 1999 「常世原田遺跡—吉田格氏昭和23年調査資料—」
- 三浦武司 2015 「油江町田子平遺跡出土の縄文時代早期中葉土器の特徴と編年の位置付け」「福島県文化財センター研究紀要2014」福島県文化財センター白河館
- 領塚正浩 1997 「常世式土器の再検討」「シンポジウム押型文と沈線文 本編」長野県考古学会縄文時代(早期)部会